

誰が山脇東洋に苛私林牛私

「解体原書」を贈ったか

川島 恂 二

近代日本医学に正方向を指示してくれた「職志」の意義、続いて「紅夷オランダの書の正しく華説は誤り」と日本医学の正道を明確に教えた河口信任の「解屍編」の卓見、この正道に向って日本中の医者を奮起させ自信に満ちて歩ませた杉田玄白の「解体新書」の壮挙、・・へと連がらせた原点となり、本邦にルネサンスを発祥させた「苛私林牛私」原典が、あの洋書所持嚴禁の幕制下でありながら、如何にして東洋の手に入り得たのであろうか。それには誰が贈ったのであろうか。このことは極めて重要な課題でありながら、石原説（故石原明氏）が否定された後、依然暗黒である。

私は幸いに河口信任の致仕した土井古河藩に産れたの

で、土井藩を中心にして信任の紅夷の解体原書入手を考究中に、東洋に原書を贈ったであらう人も想定して見た。

そもそも佐倉城から古河城に移封した土井利勝を祖とする土井藩は、五代利益トシマスの時、天和元年志州鳥羽城に七万石で移封されたが志州は殆ど伊勢神領で鳥羽藩には二万石きりなく、残る五万石は中江藤樹の琵琶湖北方から得た。この時、利勝遺戒十三条の一つ「医師は高級で江戸京大阪に名だたる者を召し抱え置け」に従って、藤樹系の名儒医や、京からはカスバル門弟河口良庵の子、良閑（房頼）なる蘭医を召抱えたまま十年後の元禄四年には肥前唐津城に移封した。

当時、長崎奉行所には十数藩が常駐又は交代で警護の手助けをしており、島原藩と唐津藩は年交代で長崎に詰めた。唐津藩は、松浦氏の伝統の海軍の本領を発揮して、長崎港の西側出口の木鉢港キバシに常駐し、別に東中町に「聞役座キキヤクザ」を持ち、立山御作事の隣りに住した。藩主の土井利益、土井利実トシノブ、土井利里トシサトの三侯は実地に長崎に巡見して蘭船の姿を實見した。

元禄三年鳥羽城で産れた利実が正徳三年（一七一三）唐津城主となると、享保元年から配下の木鉢港には長崎奉行が「唐船見送番所」を設けて、唐船の私的闊貿易を監視することとなり、唐船側即ち唐人館からは好意的に見てくれる様に接触してきたと思われ、番所のできた翌享保二年には利実長崎巡見があり、永代家老の小杉元卿は其後も唐人側招待で長崎に赴き、享保九年（一七二四）には、唐人館に亡命中の金州長官の高友三と鴻臚館に会談し、高氏は中国代表の長官正装礼服を着て日本國小杉氏に扇面に墨書して贈った（現存）。この年、利実唐津城西側に藩校盈科堂（初代学監稲葉迂齋）を創設した。

次の利延侯を経て延享二年利里が城主となり、同年京都に名医を需めて、山脇東洋の無二の親友「原双桂」（原璋、字公璋、小字三石衛門、号雙桂、又号尚庵、平安人、仕唐津侯。侯後移封古河）廿八歳が唐津の召請を受けた。双桂は京三条街に産れ伊藤東涯に学び、十四歳で父を亡い、大阪、江戸に医を学び、再び京に戻って東洋と親しく学び合った。

東洋は瀕りと唐津の僻地下りに反対した（原念齋著「桂館野乗」）が、双桂は唐津に赴任後忽ち良医の程が士民の間に

博まり利里侯の高い信を得て高遇された。利里は寛延元年（一七四八）、越前大野土井支藩利知の娘を貰い、小杉氏は祝品等を長崎に求めてこの小杉氏に従い双桂も長崎に赴き、其後、双桂は数回長崎を訪ねている。

宝曆十年の利里侯長崎巡見に小杉氏、双桂は随行し、双桂門下の河口信任はこの時従って、二回目の長崎遊学栗崎道意入門をした。利里一行は唐人館の鴻臚館（唐人屋敷の迎賓室。奉行命で藩主と雖も入館厳禁につき、藩公一行はお忍びである。唐船見送番所のある唐津藩なので秘かに紹じた。）と福濟寺（華僧大鵬）を訪ね、双桂は唐人館でも福濟寺でも華人より何事も知りよく発音し利里の信愈々厚く帰藩後、盈科堂学監に拔擢された。（先哲叢談卷八、「桂館野乗」）

かくて寛延元年（一七四八）から宝曆四年（一七五四）の間に、双桂は、唐津藩の俸を借りて、鴻臚館で、嘗って東洋と京で癩を解き学び合った古医方経験から人体を、西洋人は如う見ているか、を、是非原書を手入したいと頼んだと考える。唐人館側は中国の国威にかけて華僧（恐らく大鵬和尚）に頼む。当時、出島には華僧と女郎のみは無許可で入れたから、命ぜられた華僧は出島に赴き時の大通事吉雄耕

牛に頼み、吉雄は商館長に註文をしたと思う。

商館長は「獺の内景から人体内景を推して見たい」との註文につき、高級高額の比較解剖学で書かれた Vestingii のアムステルダム版を取り寄せる。取り寄せた原書はラテン語かオランダ語か不明だが吉雄は双方読めたので「苛私林牛私」と書いて渡してくれた。

本は華僧、鴻臚館、唐津聞役座連絡、木鉢港から唐津へ、更に双桂の極秘使者仕向けで瀬戸内海から大阪港に上って京都の東洋に直行という次第で、つまり双桂が東洋に原書を贈ったと考える。

宝暦十三年五月十五日古河城請取同日唐津城渡して河口信任は最後の便船迄、加福氏から借りた蘭医書を写本した。一方、宝暦十二年春に利里侯、小杉氏、双桂等の上級者は先発し、この途次、双桂は十八年振りに京に東洋を訪ねた。途遇_ニ東洋_一。東洋握_ニ祖_手。・（「先哲叢談」巻八）、東洋と双桂は幕府禁書の贈呈と臆志刊行を喜び手を握り合って感激の対面をした。この年の八月一日に東洋は没した。

以上の如く、双桂の高官の地位と唐津藩の長崎役の運用

を利用して、高級高額の比較解剖のウエスリング解体原書は、長崎の地から京の東洋に贈られたと考える次第である。

（眼科開業）